

---

SoulEater - fate-

frost

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Soul Eater -fate-

### 【ZPDF】

Z7809U

### 【作者名】

frost

### 【あらすじ】

Soul Eaterとfateのクロスオーバー小説。

答えを得た彼が、Soul Eaterの世界へ飛ばされてしまう。

彼の運命は再び動き出す。

テンプレ、独自解釈、オリジナル設定など多数存在します。勢いで書いて、矛盾もたくさん出てくるかもしません。

苦手な方は読むのをやめたほうがいいと思われます。

更新が遅いですが、どうぞ！

8/18に改変しました。

かなりお話を変えたので、初めから読むことをお勧めします。

? (前書き)

それなりに反応があったので・・・連載する」と決意しました！  
ノリと勢いで書く予定です。

お付き合いいただけたら嬉しいです。

?

「凛、私を頼む。知つての通り頼りない奴だからな」「アーチャー……うん！分かつて。私頑張るから、きっとあいつが自分を好きになるように頑張るから！」

「答えは得た。大丈夫だよ遠坂。俺もこれから頑張つていいくから」

「そういうて、私は座へと帰還した。

それははずなのだ。

なのに、今いる場所は砂漠地帯。  
口の中に砂が入つて、じやりじやりする。

周りを見渡す限り砂、砂、砂。正直うんざりする。  
どこか街を探さないと、餓死する可能性もある。  
仕方が無いと歩き出す。

どの世界にいても、私の幸運値はEなのだろう。

「あつごめんねーちょっと、うつかりで落とす座標間違えちゃった

」  
赤いアクマの言葉が頭に響く。あれ？  
ちょっと現実逃避をした後に、思い出す。

私が、凛と別れた後、羊水のような場所に入った。

多分、座なのだろう。暖かく意識が解けていく。

ここで、記憶は記録になり、私という存在が消えていく。そう感じていた。

「あつシロウ」

声のする方を見るとイリヤがいる。

始めはもうすぐ消える私に幻覚を見せているのか？意味のないことなのに。そう思っていた。

しかし、田の前のイリヤは私を頭を叩き、

「もうー！シロウ！無視しないでよ

ほほを膨らませ、怒っているようだ。

なぜ、幻のイリヤに怒られないといふか。よく見ると本物のイリヤだ。

「なんだと……」

「なんでって？」

「なんでイリヤがこゝに来ー！」

「えー私聖杯だよ？なんでも夢が叶う願望機だよ？座の千渉ぐらい簡単だよ！」

「座の千渉……」

「私の思いが聖杯に反応したみたいだ」

「思い？」

「うん。やっぱシロウには幸せになつて欲しいから」「

「イリヤ……」

「私お姉さんだよー？弟の幸せのために人肌脱ぐんだから」

そういうい、イリヤは何かの呪文を唱えだした。

「コンやサクラにも手伝つてもいいし、シロウをこじこじなつ世界に送るね？」

私の足元に、魔方陣が展開される。

「え……！？」

田の前が真っ白になる。そのときに聞こえたイリヤの声。

「シロウは自分の信じた道を歩き続けて」

思い出した。

そういうえば、そうだった。なぜこんな場所にいるのか。その記憶がよみがえる。

そう、ここは私のしらない異世界なのだ。

まずは体の構造を把握するところから、はじめめる。

「トレースオン  
構造把握」

身体異常なし。受肉している模様  
ただし、肉体年齢は、16歳

精神異常なし。

ただし、ところどころ記憶に摩擦あり

魔力異常なし。魔術回路も数本増える

ただし、ここでの世界に合わせてソウルプロテクトがかかる  
投影異常なし。英靈時の能力を引き出せる

ただし、エクスカリバーは投影できない

ん？ エクスカリバーが投影できないのか？

少し疑問に思つたが、投影できないのなら仕方が無い。

結果がでた。

基本的には体は良好である。しいて言えば、水分が少し足りないくらいか。

しかし、肉体年齢が16歳か……

やはり筋肉がつく前の体は何かと不便である。この世界にあわせているのである。

もじくは赤いアクマの「つかり」が発動したか……

「投影開始」

トレースオン

出てきたのは、千将莫耶

かんじょうばくや

陰陽一振りの短剣で黒い方が陽剣・千将、白い方が陰剣・莫耶。あの聖杯戦争中にはお世話になつた夫婦剣だ。

構造把握の時同じく、自然に出せる。問題ない。

剣を破棄し、再び歩き出した。

甘く見ていた。やっぱり、赤いアクマのせいではないのかと本氣で思つ。

先ほどの現実逃避の会話は、飛ばされた瞬間に言われた本当の記憶では、ないのだろうか。

歩いても歩いても、砂漠ばかり。

そして、受肉しているということが仇となつてゐるのか。

水分を取ることが出来ていない。

このままでは、死ぬ。

それが、私の最後の記憶。

砂漠のど真ん中で、行き倒れた。



? (前書き)

ノリと勢いで書いています！  
何回か、読み返していますが、誤字脱字があれば報告していただけ  
ると幸いです。

?

田を覚ましたら、真っ白な部屋にいた。

どう見ても、学校の保健室だった。

「ふむ」

思わず考へ込む。さつきまで、砂漠にいたはずなのだが、なぜこんな設備の整った場所にいるのだろう。

「あれ？ 起きたんだ」

人の声がしたので、思わず身構える。いつでも戦闘できるよう。

「ソウル！ 倒れていた人が起きたみたい」

顔をのぞかせたのは、一人の少女。

ツインテールで、見た田は14歳くらいの少女。敵対心は無いようだ。

「あつあん？」

もう一人男の子も来た。少女が言つには、ソウルと呼ばれていた男の子だ。

人間に見えるが……気配が少女と違う。

警戒しつつ、少女に尋ねる。

「ハリハ、ジンなのだろつか？」

「ハリハ、死武専の保健室だよ」

「なぜそのような場所に？」

「なぜって、貴方砂漠で倒れてたんだよ？」

マカ＝アルバーンは武器職人である。

相方のソウルイーターを死神様の元で仕える「デスサイズ」にするために、99個の鬼神の卵と化した魂と魔女<sup>まじょ</sup>の魂1個。合計100個の魂を集めていた。

もちろん、鬼神<sup>きしん</sup>の卵と化した魂を98個集め済みである。

今回の仕事は、切り裂きジャックという鬼神<sup>きしん</sup>の卵と化した魂を狩るために、ロンズンまで出向いた。

もちろん、仕事は楽勝である。

今日も仕事を終え、死神様に報告しソウルの運転で死武専に戻つていた。

砂漠を通り、家に帰<sup>か</sup>りとしていた。そのとき、赤い色の何かを発見した。

マカはそれに気がつき、ソウルに囁く。

「ねえあれって、人じゃない？」

「まさか、こんな場所に人なんていねえよ

「でも、倒れているように見えない？ 人だつたらやばいんじやないかなあ」

「とりあえず近くに行つてみるか

ソウルと一緒に赤い何かに近づく。

近づくと解る。人だつた。  
白髪に肌はこげ茶色、そして赤い服を着ているのだ。見た目も服装  
も珍しい人であった。

よく見ると、まだ生きている。

うわー」と、

「タイガーが……タイガーが……」

なんていつている。しかし、タイガーツテ虎にでも襲われたのだろうか？ 砂漠だからありえないとは思うが……

「このままほつといて、死なれたら田代覚め悪いし乗せれる？」

「なんとかなるとは思うが……いいのか？」

「じゅんな男は、人助けをするもんでしょ？」

「まあそうだけじょー」

「あとで、死神様に報告すればなんとかなると思つしね」

マカは、倒れている男の人を引きずり、ソウルと一緒にバイクに乗せる。

そして、そのまま保健室へとつれていったのだ。

「（）まで運んでくれたのか。お礼を言わなければな。ありがとう  
にこやかにお礼を言つ。

一応命の恩人なのだ。警戒心を緩める。

少女は少し顔を赤くし、

「とりあえず、休んでいてよ。死神様に報告してくるから」

そういうて、保健室から走り去るよつて出て行つた。

「死神様……」

私は少女の言つていた死神という単語に引っかかりを感じていた。

死神とは、本来悪といつて定義に分類されることが多い。

死をつかさどるものだからそういうこいつたイメージが強いのだと想つ。

彼女は死神様に報告をする。そいつっていた。

とこいつことは、ここを統括するのは死神だといつことが伺える。

私は、一体どういった世界に流れ着いたのか……もう少し調べるしかない。

そう考えていたら

「そういうえば、お前なんで砂漠で行き倒れてたんだ？」

ソウルと呼ばれていた少年が、私に当然の疑問をぶつける。

「すまない。砂漠で行き倒れていたせいか、少々記憶が混乱しているようなんだ。だから、私がなんで砂漠で行き倒れになつたのか覚えてないのだよ」

正直に答えるても、向こうは信じてくれないだらう。

砂漠で行き倒れて、熱のせいでの記憶混乱くらいの嘘は許してもうかるだらう。

「そりなのかな

「助けてもらつたことに感謝している。あのままだつたら、きっと

と死んでいただろうからな」

せっかくイリヤに新しい人生をくれたというのに、死んでしまっては元も子もない。

「ただいま！死神様がお呼びみたい。えーっと貴方も一緒に来てつて」

「どうやら少女が戻ってきたようだ。

「了解した」

ここは、死神様という人物に会つておくべきだらう。  
私自身の身の振り方も考えねばなるまい。

こここの場所を統括する死神……

どのようなひとなのだろうか。

そんなことを思いながら、少女の後をついていった。

? (後書き)

うーん。なんか微妙なオリジナルですね。  
うまくエミヤっぽさが出てるといいんですが・・・でているので  
しょうか?

次は死神様との駆け引きです。

? (前書き)

……すみません！

なんというか駄文です。

設定が生かしきれていないといつか・・・

グダグダでもいいよつて心の優しい方ども。

?

健全なる魂は、健全なる精神と健全なる肉体に宿る。

死神武器専門学校《しにがみぶきせんもんがつ》略して死武専  
じぶせん  
だ。

その生徒である「職人」と「武器」  
その義務とはただひとつ。

「99個の人間の魂」と「1個の魔女の魂」を武器に食べさせ  
死神様の武器である「デスマサイズ」を作ることである。

少女に連れられ、ギロチンの鳥居が立ち並ぶ回廊を歩く。

なんていうか……趣味が悪いといつか。

回廊を抜けると、鏡がひとつだけあるシンプルな部屋に出た。天井  
には青空。

別世界に移動したような感覚に陥る部屋だった。

そこには、真っ黒な装束を着ていて、髑髏の仮面をつけていた人が

いた。

ただし、人と言つて良いのか、わからんが。

「ちーっす！」

ノリ軽つーしかもしゃべるんだ。

「「」んにちはー死神様」

「彼が、行き倒れていたという?」

「はい」

「ふーん。マカちゃんとソウルくんは、授業があるから、そつちに行きなさい」

「はーい」

死神様に言われ、マカと呼ばれていた少女とソウルと呼ばれていた少年は、部屋を出て行く。

そして、その部屋には私と死神様と呼ばれる人と一人っきりになってしまった。

死神様は、「ちらに近づいて、そして話しかけてきた。

「さてさて、君は一体何者だい?」

いきなりストレートに聞いてくる。

「何者と聞かれても……人間と答えるしかないと思つが」

それ以外にどう答えるというのだ。

英靈は、なんか違うし……受肉している時点で一応人間のくくりに入るのだと思う。

まあセイバーみたいな例外もあるから、なんともいえないが。

「人間？君が？」

疑いの目を向ける。  
私だって、自分の置かれている状況がいまいちわかつていないと  
うのに！  
どう答えると！

「君は、人間じゃなくて、魔女に近い」

「魔女……」

この世には、魔女がいるのか。ということは、魔法が存在するとい  
うことだ。もつとも、私の世界の魔法と同じとは、限らないが。

「それに……君の身のこなしといい雰囲気といい只者じゃないこと  
くらいは解るよ」

一目見ただけで、解るとは……死神様と呼ばれるだけはあるのかも  
しない。

それに、さっきから死神様からの視線で背中がむず痒い。

なんというか、あからさまに信用してませんよ。っていう視線だか  
らだ。

という自分もそんな視線を死神様に送っているのだから、お互い様  
なのだが。

「とりあえず、自己紹介しようか。死神様だよー！君は？」

「私が？私はえ……いや、アーチャーだ」

「アーチャーくん。じゃあ特技は？」

「”くん”づけで呼ばなくていい。特技は家事全般と機械いじりだな」

「それじゃあ死神チョップ」

「えつ！」

ガン！

警戒していなかつたのか？と聞かれれば、もちろんしてたよ。って  
答える。

でも死神様の攻撃は軌道が読めなかつた。反応はしたんだが……  
当たつた場所はもちろん頭。

星が見えて、少しくらいわかる。

「あつ……とりあえずそんなに肩肘張らなくともいいからさ。もつ  
と前向きにいこーよ」

「だからって、チョップはないと思うのだが

「あー『めん』『めん』なんかこの空氣をぶち壊すにはそいつた  
ツキリがないとね」

「……」

涙目で思わずにらみ返してしまった。そんな理不尽な理由でなげられるのか。

「君が何者か。その問いはいいよ。これから、君をどうするかだけど……」

殺されるのだけは、勘弁だ。殺されそうになつたら、必死に逃げる。殺されたら、イリヤに顔向けできない。

それだけ心に決めて、次の言葉を待つ。

「アーチャーくんはここで働いてもらいまーす」

「……いいのか？ 得体の知れない輩をこんな場所において

思わず聞いた。

「あーうん。いいよ。来るものを拒まず、去るものを追わずといったところだからねー」

なんとものんきな神様。

見た感じは、優しさにあふれているが内に秘めている闘志は計り知れない。

敵に回すとやっかいな人物だ。

「君に衣食住を与えるからさ、君の力を貸して欲しい」

「……私はたいした力を持つてないぞ」

その言葉に、死神様は考え込み  
そして話始めた。

「実はね、君の事ある人から聞いてたんだよ。その人とは昔の知り合いでね。いろいろ話を聞いているから君がここにきたって聞いたときあまり驚かなかつたんだよね」

「ある人？」

「キシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグだよーん」

「なんですかー？」

名前だけなら、知っている。凜の師匠で有名な魔術師だからだ。

キシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグと出会ったのは、運が良かつたとしかいえない。

死神は今まで覚えている。

死神は知っていた。この世界のほかにも平行世界が存在していると  
いうことを。

たまたま、宝石爺のゼルレッチと出会つて、平行世界があることを  
確信した。

その人と意外とウマが合い、様々な知識の交換をした。

それ以来、ゼルレッチとは手紙友達みたいな存在だ。

そんな彼から連絡がきた。

君の世界に私の弟子の知り合いが飛ばされたかもしれない。  
もし君の元へ来たのなら受け入れてくれないか？

そして彼のやりたいようにやらせてやってほしい。

君の敵になったとしても遠慮なくぶつ潰してくれたまえ。

それでも、対処できないようなら、いつでも私に連絡をしてくるといい。

初めは信じられなかつた。異世界で平行世界のこの世界に人間を飛ばせるはずがないと思っていたから。

でもマカちゃんの報告で、彼がこの世界に来ていることを知つた。

赤い服に白髪そしてこげ茶色の肌の男。

マカちゃんが連れてきた彼を見た瞬間確信した。

ゼルレッチの話は本当だ。だつたらすことば一つ。

受け入れることだけだ。

「ゼルレッチのお弟子さんからの伝言を受けてるよー」

「凛から？」

「えーと《変なところに落っこちる》なん一いつかりが発動しちゃつたみたい。その代わり、貴方がこの世界になじみやすいように、死神様にある程度話を通しているから。後はあんたが思つよつに生きなさい。それが桜の願いであり、私の願いでもあるんだから》とのこと」

「……はは」

思わず笑つてしまつ。凛らしい。

私は自分の思ひよつに生きてこくよ。桜、凛。

「死神様ありがとうございます。私の力で良いのなら貸せつ」

? (後書き)

「めんなさい。もしかしたらまた内容変更するかもしません。

クロス小説は意外に難しいものだと知った。今日この頃です。  
名前はエミヤを隠し、アーチャーでいきたいと思います。

死神様のアーチャーくんはこのままでいきたいなと思つてたり。

そろそろ、マカやブラックスター、キッドたちに会わせたいです。  
でもまだ原作に入らないかも?

? (前書き)

最近微妙な話しかつくりっていない。  
オリジナルです。

?

「」の世界は、2種類の魂がある。

一つ目が善人の魂

二つ目が悪人の魂

死武専の生徒が集める魂は悪人の魂。

それは、何故か。

「鬼神」という化け物を生まないためにであった。

「それで、力を貸して欲しいといふことだが……」

死神様に聞く。

彼は力を貸して欲しいといった。

なにか問題が起きる、または起きているといふことだ。

「うん。君には死武専に入学してもらって、彼らの成長を見守つて  
欲しい」

そういうて、目の前に現れる写真。

一枚目は、ツインテールの助けてくれた少女が写っている。

名前はマカニ・アルバーン

鎌職人で、現死神様のデスサイズの娘。

一枚目は、これまた助けてくれた少年の方が写っている。

名前はソウル・イーター

彼はマカのパートナーで魔鎌だ。

三枚目は、水色の髪で我の強そうな少年が写っている。

名前はブラック・スター

暗器職人で、星一族の生き残り。

四枚目は、髪の長いおとなしそうな少女が写っている。

名前は椿

パートナーはブラック・スターで魔暗器だ。

五枚目は、髪の毛に三本線が入っている少年が写っている。

名前はデス・ザ・キッド

彼は死神で死神様の息子である。

六枚目は元気のよそそな少女と少し大人びた少女一人が写っている。

名前はリズ・トンプソンとパーティ・トンプソン  
パートナーはデス・ザ・キッドで一丁魔拳銃だ。

「ふむ。了解した」

その写真を死神に返す。

「もう転校手続きはしてるから。明日から宜しく！」

死神様は声のトーンが上がっている。

えつ？明日からなんですか？かなりいきなりだな！

「とりあえず、住む場所に案内していただけると嬉しいんですけど…」

今田中に、街の把握をしておかないといけない。学校が始まつたら、学校に拘束されるからだ。

「じゃ、ちょっと待つて！」

そういうて、死神様はだれかを呼ぶ。

待つこと数分。

一人のショートカットの少女がこの部屋にきた。

「キム・ディールです。なんでしょうか？死神様」

「キムちゃん。彼を死武専のお泊り室に案内してあげて」

「彼は？」

「ああ、アーチャーくん。明日から死武専に通うことになつたんだよ。家の用意が出来てないからさ。一時的にあそこに住んでもらつんだよー」

「はあ……わかりました。それじゃ、ついてきてください」

そういうつて、少女は部屋を出ようとするので、アーチャーは振り返り一応死神様に一礼し、部屋を出た。

部屋に残っている死神はつぶやく。

「彼の存在がわれわれの世界にどのような影響がでるのか……」

ゼルレッちゃん……これからがすいじく楽しめだよ

部屋を出で、少女についでいくと、お泊り室と書かれた札が見える。

「ルリがお泊り室よ」

「ほひ。簡易的なものだが、しつかりとしているのだな」

しかし、じ飯を作る場所がない。

「ひとつ質問していいか?」

「ん? 何?」

キムは帰らつとじていたところを引き止めて聞く。

「食事は?」

「ああ、もつてきてくれるわよ。寮みたいなもんだから」

「やうなのが。ルリまで案内してくれてありがと」

お礼を言つと、キムは驚きながら

「死神様の命令だからよ」

そついつて、部屋を出て行つた。

「構造把握」  
トレスオン

死武専そのものの構造把握をする。

部屋の位置、ルート全てを把握し、頭に叩き込む。

そして、屋上へと向かつた。

屋上に出て、初めに目に付いたのは、笑う太陽であった。

太陽がワハハと笑つている。

不気味だがそういう世界なのだろう。

とにかく、アーチャーというスキルを保持したままなので、鷹の眼を持つている私は、町全体を見渡す。だいたいの構造はわかつた。

あとは、慣れだらう。

そろそろ、部屋に戻つた方が良いかもしない。

アーチャーは屋上から去り部屋へと戻る。

そのとき女人の人と入れ違つた。

「ふふ、これからが楽しみだわ」

そう聞こえた。

アーチャーは振り返る。しかしそこには、女人人はいない。

「嫌な予感がするな」

アーチャーの胸に疑惑の芽を植えつけっここの日は終わった。

? (後書き)

土下座ものですかね。なんかテンポよく書けないんですね。

次は原作介入開始です！

? (前書き)

原作介入開始です。

8 / 18 改定

?

鬼神とは、善人の魂を吸収し、力をつけたもののことと言つ。

死神様が定めている、死神リストに載つていない人の魂を喰らうことで、鬼神となるのだ。

もつ一度と鬼神を作ることがないようだ、作った施設が、

死神武器専門学校

通称死武専しぶせんだ。

マカはソウルと一緒に死神様の部屋へと向かつた。

「みけんに女神事件」

自由の女神がみけん（・・・）に刺さつて死んだという。

その被害者は前任のシド先生らしい。

しかし、最近死武専しぶせんに変な噂が流れている。

それは、「死武専」の生徒が変な男に狙われているという噂だ。

そしてボコボコにやられた生徒は犯人を自撃したらしい。

その犯人は、なんとみけんに穴の開いたゾンビだというのだ。

ギロチンの鳥居をぐぐり、死神様のもとへ向かつ。

すでに、ブラックスターと椿ちゃんもいる。（とこうより、鳥居の上でなんかしてたみたい）

「はいはい！ちーっす！ういっす！お疲れさん！」

「こんにちはー」「  
「おう！」  
「用つてなんだ？」  
「はい」

それぞれ挨拶をする。

「さてさて、本題に入るかな。君たちに、あと受けでもらいたいものがあるんだがね」

「？」

何の話か見えてこない。

「補習だよ」

「ええ！補習って、あのお馬鹿が受ける補習ですか？」

「やだよ。最強のデスサイズになる俺が受けるものじゃねえ  
マカとソウルは反論する。  
すると死神様は

「君たち、職人と武器の義務は？」

「マカは答える。

「99個の人間の魂と1個の魔女の魂を武器に食べさせ、死神様の武器「デスサイズ」をつくる」とです」

「うん でも君たち今日現在集めた魂！」

「〇個じゃん！」

ソウルやマカは何も言えなくなり、ブラックスターは笑い、椿は謝っていた。

「で、補習の内容はこの前まで死武専の先生だつたシド先生の話……ゾンビ化して生徒を襲つてはいるつて話を聞いたりしてる？」

「ほら、言つた通りだろ？」

「でも……あんなにやさしかつた先生が……」

「うん。生きてるときはいい先生だつたんだけど、ゾンビになつて死からの恐怖が解放されてから、生徒に自分と同じ経験をさせてやるつていつてはた迷惑な授業という名の暴走をしちゃつてゐみたいなんだよね。しかもシド先生をゾンビ化させた何者かが裏で手を引いているのは確かだね」

「〇・Ｋ！ まかせりよーダンナ。そいつの魂をとつてくりやあいいんだるิづへー」

「はいー・セウムヒー」と一 あつもじこの補習を落とすよつない、退学だからね 「

「ええええええええ！」

「ほんじゃー応援なんかしあやつてるからさガンバつてー！」

しばらくして、赤い外套を着た男が死神様の部屋へとやってきた。

「それで、好き勝手やつてよいのだろう？」

「もちろん ほどほどにね」

「…………で、どこで仕掛ければいい？」

「…………だよ～ん」

「了解した。あの男は知っているのだろう？」

「もちろん。じゃないと、意味がないからね」

赤い男 アーチャーはそのまま死神様の部屋を出て行つた。

シド先生が出てくるという墓場まで來た。

その墓場の名前は鉤爪墓地フックセメタリ

マカはいまだショックを受けたままである。

椿はそれを宥め、ブラック スターとソウルはシド先生を探しつつも好き勝手やつていた。

それを遠くから見ている一人の男 アーチャー。

この世界は、武器も意思を持った人なのだそうだ。

その一人が息を合わせて戦う。

聖杯戦争を思い出すな。  
せいはいせんそう

二人一組で聖杯を求める戦い合つあの忌々しい戦争。

感傷に浸っている間に、どうやら敵が現れたようだ。

マカは足を捕られソウルがカバーする。

出でたのはゾンビ。

ふむ。実際に見ると、強烈だな。

「おはよつ。こんにちは。こんばんは。お久しぶりDEATH  
は挨拶をかかさない男だった」  
デス

「なんで…シド先生…」

「K-E-L-L-I-N-Gカーンカーン まず、聞くより習え」

シド先生は攻撃を繰り出す。

すでに戦いの火蓋は切って落とされたのだ。

俺

? (後書き)

次は、シュタインまで行きたいです！いろいろオリジナルのお話を入れたらしいなと思います。

? (前書き)

おまたせしましたー相変わらず文章がへたといつか。

戦闘シーンをもっとかっこよく書くためには、きっとたくさんの本を読まないと難しいんだろうなと思いました。

8/18 改変

?

## 魂の共鳴

それは職人と武器の魂の波長を合わせることにより、武器の技がだせる。

一撃必殺の攻撃だ。

魂の波長とは、その人が持つていてる魂の形。

鬼神の卵と化した魂に攻撃を与えることの出来る唯一の力。

職人も武器もそれぞれ性格によって、魂の波長が異なるという。

職人と武器の相性が悪ければ、職人はその武器を使うことは出来ない。

また、職人も武器も心をもつていてる。

心が揺れれば、波長も変わるのである。

アーチャーはひたすら、マカやブラックスターの戦いを見ていた。

マカは、先生という知り合い相手だからだろう。動きが鈍い。

マカを後退させ、その隙にシドは

「コレシング・サンダード  
十字落とし」

ブラック スターに攻撃を引く。

ふむ。どうやら手加減しているようだ。一いつから力に合わせて攻撃しているようだな。

「K-H-L」「ーンカーンコーン。授業も終わり……そろそろ死ぬか?」

そのとき、ブラック スターが起きて、シドに攻撃をする。

「オレ・オン・ステージだらうが!」

暗殺者のように、軽やかなステップ。攻撃に隙がない。

「三ツ星も一つ星も関係ねエー。俺は一黒ブラックスター星だあ!」

シドの鳩尾を狙つての攻撃。なかなかいい攻撃だ。

が、甘い。一撃でやられとこうのなら、もう少し左上に撃たないと監視にはならない。

シドは、ブラック スターの攻撃をよけ、マカに攻撃をする。

「コレシング・サンダード  
十字落とし!」

マカは、その攻撃をわずかな隙間に入りかわす。

ほう。恐怖心を捨て去り、攻撃に転じる。すうい勇気だ。

攻撃が当たるかも知れない。そう考えるだけで人の動きは鈍くなるものだ。

その恐怖心に打ち勝ち次の手を考える。これが、戦場で勝ち残れる力となる。

面白い子たちだな。

「マカ！あれをやるぞ！」「魂の波長」をあわせる！

「…でも、あれ一度も成功してないよ！」

「できる！俺たちなり！」

「「魂の共鳴…」」

マカの力がソウルの力と混ざり合い、力が強くなる。

「行くぞ！鎌職人伝統の大技！ 魔女狩り（まじょがり）」

マカの鎌 ソウル自身が透明になり、透き通った大鎌となる。

「いッ！？」

マカが足を滑らせ必殺技と思われる攻撃はブラックスターの近くを通り、攻撃が外れる。

「何しやがんだー！殺す氣か！」

ブラック スターはマカに文句を言つ。

「私はシンプルに行きたかったのに…」

マカは、シド先生に攻撃するが、当たらずシド先生は地中へ潜る。

そのせいで、マカは反応できない。

が、ブラック スターの雰囲気が変わる。

「俺様のステージに上がんな。腐れゾンビがー！暗殺者は一人もいらっしゃんだよ。俺が目立たねえ」

「トランプスター  
罷 星」

すると、ブラック スターが持っている鎖 椿の鎖が地面に張り巡らされる。

周りが無音になる。相手の気配をうかがい、出方を見ている。

ボコ

音をたてて、シドはブラック スターに攻撃をかけようとする。

「罷 星発動！」

見事に、シド先生を捕まえた。もちろん、マカも一緒に。

それを見届けると同時に、アーチャーは動き出す。

「お前たちの力……見せてもらひたい」

死神様と一緒にマカ、ソウル、ブラックスター、椿の補習を見ていた少年と一人の少女。

黒髪の左側には、白い三本線。

そり、死神様の息子のデス・ザ・キッドだ。

「ふーん。後は、シド先生をゾンビ化させた黒幕でしょ？ 誰なんだい？ 父上。只者ではないんだろう？」

「……」

死神は無言のままだつたが、あきらめて話し始める。

「私の武器、デスサイズ君。彼を鍛え上げたのは、マカちゃんのお母さんだ。でも彼女は、二代目パートナーなんだよ」

「ということは、初代が？」

「そう初代パートナー、シュタイン君が今回の黒幕だよ」

「……」

「そして、彼は死武専の卒業生の中でも最強の職人だった男だよ」

死神の答えを聞いたキッドの目がきらつぶ。

「補習にしては、その課題……さつすぎるんじゃないかい？間違いなく、彼らは死ぬよ？」

シド先生から、ゾンビ化させた犯人を聞きだすのにひと悶着あつたが、犯人が解つた。

名前はシュタイン博士。場所はテスシティのはずれにある研究所だ。

「シュタイン博士ってどんなひとだろう」

つぎはまだらけの研究所を見上げながら、マカはつぶやく。  
どこにシュタインがいるのか、探していたときにつきなり扉が開いた。

そして、ガラガラという音が大きくなる。何かを運んでいる音のようだ。

マカたちは何が来るのか息を呑んで見つめた。

ガツン！

玄関のところで、躊躇の瞬間

「ふぎやあ！」

椅子の上から人が落ちてきた。その人の頭にはねじがある。

そこにはいた全員の動きが止まる。

「クソ！まだ調子が悪いな！」

そういうで、ねじを回し始めた。

「OKーもう一度やらせてくれ」

そういうで、さっきの人は椅子をもって中へと入つていった。

そして、もう一度椅子にのつて颯爽と登場していたが、やはり扉の段差でつまずき盛大にこけた。

「シユタイン博士、まだ調子が悪いんじゃないか？」

シユタインの研究室から、もう一人男が出てきた。

白髪で赤い外套の男である。

思わずマカとソウルは驚く。

「ん？死武専の生徒か？」

白い髪の男はたずねる。

「ああー・シユタインをとつ捕まえにきたつてわけだ！」

ブラック スターは大きな声で言つ。

「ふむ。そつか……ならば、ここから立ち去れ」

「雇い主無視で会話しない」

「良いだろう？私は好き勝手していいという許しがあるのだからな。  
それに、見極めておきたいのだよ」

「全く……」これだから堅物は困りますねエ？」

マカに話しかけるシユタイン。

マカは戸惑つている。

「シユタインを倒すなら、私を倒してからいけ」

赤い外套を着た少年はそつといった。

? (後書き)

かなり変えました。

改変前と後どちら方が面白いでしょうか?  
コメントしていただけたら嬉しいです。

? (前書き)

遅くなりました！  
あまつ進んでないです。もっとテンポよくし  
ていきたい。  
8 / 18 改変

?

職人と武器はエレキギターとアンプ（スピーカー）の関係に似ている。

エレキギター（職人）だけでだせる音（魂の波長）は「ぐく小さなものである。

しかしアンプ（武器）をつなげることによって「魂の波長」を増幅させ大きな力を出す。

でも、まれにギター一本（職人）だけで強力な魂の波長を出すことが出来る人もいるのだ。

「お前みたいなわけわからん奴に俺様は止められないぜ！椿！」

「はい！」

椿は武器に変身し、ブラックスターに加勢する。

ブラックスターはアーチャーに対して攻撃を行なう。

まずは椿を鎖鎌に変身させる。  
鎖を使いアーチャーの動きを止めようとする。

しかし、アーチャーは避け、ブラックスターの後ろを奪つ。

そして、干将莫耶を突きつける。

「甘じや。 そんなんではすぐ死ぬ」

「チツ！お前……俺以上に立ちはがつて……」

ブラックスターは舌打ちをして、椿を煙球に巻きこせ、煙を吹く。  
その瞬間に足払いをし、アーチャーから距離をとる。  
アーチャーは、体勢を崩され少し驚いた顔をし、煙から逃れるために後ろに下がる。

そう見せかけ、マ力に攻撃するために近寄る。

それに気がついたソウル。

反応は良いようだ。

ソウルは武器に変身し叫ぶ。

「マカ……気をつけろ…来るぞ  
「えつ…づん…」

干将莫耶の攻撃を受けとめる。

「ほつ……」

少しあはやぬつだ。畠の血分以上ではあるな。

今までの戦闘経験によるものか。

マカは鎌を振る。

それを避け千将莫耶を振り下ろす。

かんじょうや

しかし、右腕に椿の鎖が絡みつく。その瞬間を狙いマカはアーチャーの体勢を崩し、鎌で攻撃する。

「やるな」

紙一重のところで避け、椿の方を見ると、ブラックスターがいい。

「俺はここだよー。」

そういうて、掌底に魂の波長を込めてアーチャーに打ち込む。

「黒星ビッグウェーブー！」

アーチャーは吹っ飛んだ。

意識が飛びそうになる。

体中がずきずきする。

バーサーカー戦をしたときみたいに……

「いや……あの時よりはマシか」

魔力は殆ど防御に回した。

体を強化させ、ダメージを減らす予定だつたが、あの攻撃は相性が悪かつたのだろう。

それに、攻撃を受ける瞬間嫌な予感がしたから、なるべく致命傷にならないよう全力で回避したが、それでもかなりのダメージだ。

魔力と似た力を使っていた。

あの攻撃には注意しておかないといけないな。

「あら、……用心棒の彼がやられちやつた。さて、ある程度データも取れだし、俺の番か」

動かなくなつたアーチャーを見てシュタインはそういひ。

「俺の魂が欲しいんだろう？ 実験を始めましょうか」

マカは、赤い外套の男を見つめていたが、シュタインと向き合ひ、話しかける。

「なんで、死武専の生徒を襲うの？ 何かつらみもあるわけ？」

「別に……動機はいたつてシンプルですよ？”観察”と”研究”ですか。ただそれだけです。この世の全てが研究材料……もちろん、俺自身もね」

椅子に座り、へらへらした様子で、ソウルとマ力を見て言つ。

「君たちの魂はずいぶん魂の波長が安定してないネエ……ひねくれ者で皮肉屋な魂とまじめで頑張り屋さんな魂 も共鳴しているようで、していいない」

「何!? 生きている人間の魂が見えるのか! お前、職人! ?」「しかも性質まで見抜けるなんて、超一流の職人よ! 」

次に、ブラック スターを見て、笑う。

「君はすごいなあ…… ものすごく自己主張の激しい魂ですね」

その言葉を言い終える瞬間にブラック スターはシュタイン博士に攻撃する。

しかし、シュタインはそれを片手で止める。

「君のような魂に合う武器は、なかなかないんじゃないのか?」  
椅子を回転させ、攻撃を上手く流す。

そして、ブラック スターがよろけたところを、シュタインは足を攻撃し、シュタインの攻撃が入る。

「ブラック スター! 」

椿の叫び声と同時にブラック スターは遠くへ飛ばされた。

「ああ! なるほど、君が彼のパートナーだね? 協調性が高く人を受け入れる器が大きいね。君が彼の「魂の波長」にあわせているのか?」

シユタインはちらりとアーチャーを見てつぶやく。

「彼も面白い事実が発覚しましたし……さて、本格的に始めますか」

マカもブラックスターもシユタイン博士に攻撃しようとするが、当たらない。

逆にシユタイン博士の手の内で踊らされているようだ。

シユタイン博士の掌底じょうていは自分の魂の波長を相手に打ち込む。

ブラックスターも同じことが出来るが、魂の性質を理解しているシユタインには、全く効果がなかつた。

そして、ブラックスターは、シユタイン博士に魂の波長を打ち込まれ倒れた。

「ブラックスター！」

椿はブラックスターの元へと行く。

「シユタイン！てめえー許さねえーマカーー気合入れていぐぞー！」

ソウルはやる気だが、マカの方は

「うわ……」

「どうしたー？」

「見えちゃった……」

敵に萎縮してしまつっていた。

「フフ……魂が見えたようだね」

シュタイン博士は、タバコを吸いながら、そういう。

「そんな……レベルが違うすぎる」

戦意喪失。これでは、勝てる戦いも勝てなくなるといつもの。

ソウルが必死にマカに活を入れている。

「お前が見えたのは魂だろ！未来が見たわけじゃねえ！戦う前からあきらめてどうすんだよ！マカらしくねえだろ？？」

「やうだね……」めん、ソウル。手間かけさせた

「アイ弔」

「「魂の共鳴！」」

マカは復活したようだ。ソウルを使い魔女狩り（まじょがり）を発動する。

「来い！お前らの魂見せてみるよ！」

「魔女狩り（まじょがり）！…」

このまま押し切るかと思っていたが、シュタインは、せまりくる魔女狩りを受け止めたのだ。

マカもソウルも倒れる。

そこにショタイン博士が近づく。

「俺の職人に手出しさせねえーぞ」

ソウルはマカをかばいながらいつ。

そしてショタイン博士は

「それでは、君から 合格点を上げましょ。補習授業おしま  
いでーす」

そう言った。

? (後書き)

「」で読んでください有難うござります。

? (前書き)

遅くなりました！

難産ですねー

8 / 18 加筆修正

?

死神

世界の秩序を守るため、鬼神へとなりえる魂を持つもの（悪人の魂）リスト化し、

自ら設立した死武専の生徒および世界中に点在するデスマサイズたちによつて、

その肅清を執り仕切つていゐる。

私以外は軽傷で、ドックリ補習ですといふことを伝えると、マカたちは安心していた。

まあ、私は重傷なので、少々入院する羽目になつた。すぐに全快したのだが……

もちろん、その後マカたちにも自己紹介をした。

「はじめまして、じゃないけど、私は鎌職人のマカ＝アルバーン。マカって呼んで。それで彼が、私のパートナーのソウル」「武器のソウル・イーターだ。よろしく」

「俺様は暗器職人のブラックスター！好きな言葉は天上天下唯我独尊！嫌いなものは俺様より目立つもの！そして俺様は神をも超える男になるのだ！はーははは！」

「ブラック スターの武器で椿といいます。よろしくね」

「私の名前はアーチャー。好きなことは家事と機械いじりだ。宣しくたのも」

「ところで、アーチャーは、何でシュタイン博士の用心棒なんかしていたの？」

「死神様が、死武専に入りたいのなら、シュタイン博士を守れって言われたからな」

「えつ？ そりなの？」

「そんなのだよ。試験でな。一応合格らしいが」

「そんな試験しなかつたけどな  
ソウルは言つ。

「中途入学だから、そななのかと思つていたのだが……違つのか？」

「うん。大体テストだし……」

マカはうなずく。

「まあ、合格したからいいや」

実際は、私が無理を言つて戦わせて貰つたのだが……

その代わり死神様に呼ばれ様々な任務をさせられた。

なんといつか……便利屋じゃないんだがな……

任務をしていて、様々なことを知つた。

この世界のこと、悪人の魂について、魂の概念についても。

それから魔術を人前で使うことを避けるために、固定武器を作つた。

もちろん、それをいれるホルダーも作つたぞー手作りだ。

作った武器は干将莫耶。  
かんじょうばくや

任務終わった日はそうとう体力を使うのか、死んだように寝ている。

魔力の消費が激しいのかもしれない。

「死神様報告します」

シドは死神様の部屋へと来ていた。

報告の内容は、謎の青年アーチャーに関することがある。

アーチャーがこなしてきた任務の結果と彼の戦闘能力について、詳細に書かれたプリントを死神様に渡し、シドは説明を始める。

「彼の戦闘能力は、三ツ星職人も凌ぐ強さです。状況判断・戦闘能

力共にかなり高いですね

「そうだろうねえ」

「死神様は何か知っているんですか？」

「まあ、ちょっとね

言葉を濁す死神。

シドは話を続ける。

「そうですか。あと彼の武器なのですが……」

「彼は意思のナイ武器を使うんでしょ？」

「はい。彼は鉄の塊と言っていました。彼の武器は、一般の人の農具と同じ材料で出来ているのだと思います。基本的にはそういうた農具は悪人の魂には攻撃が通らないのですが……彼の攻撃は悪人の魂にも有効なようです」

「ふうん。彼の武器には、なんらかの秘密があるということだね

「死神様……彼は一体何者なんでしょうか？」

「彼曰く、人間って言つてたよ

「彼が人間ですか？こんなに出鱈田な戦闘能力に、魂に直接攻撃できる鉄の武器を持つ彼ですよー」

シドは驚きながらも、死神に問い合わせる形で聞く。

「まあ、彼はイレギュラーといつか。魔女みたいな存在っていう認識でいいんじゃないかな」

そう、死神は信用はしているが信頼はしていないのだ。

死武専 左右対称で、蝋燭が突き刺さつたり髑髏が掲げてあつたり、城みたいな学校だつた。

その正面入口で二人の少年がいる。そう、一人はブラックスターもう一人はソウル＝イーターだつた。

「今日俺は、暗殺をしないといけない奴らがいる！」

「へへ……」

ブラックスターの決意を流すように聞くソウル。

「今、死武専で持ちきりの噂が一つある。一つ目は、死神のダンナの息子が入学するらしい！もう一つは無償で困っている人の手助けをしている赤い服の男 アーチャーの話だ！俺様の噂以外で盛り上がるのは許さねえ！」

「ああ、お前はそういうやつだ……って最後の噂か？」

そう、アーチャーの話は本当の話である。

実際、ソウルも何回かアーチャーが他の人の手助けしているのを見

たことがある。

ブラック スター的には、噂だろうがなんだろうが田立たれると  
力つくわけで……

「噂じゃなくとも、俺様より田立とうなど言語道断！」

「あつやい…………」

「それにしてもドラ息子と似非紳士はいつになつたら来るんだ！も  
う3時間も待つていいんだぞ！」

ブラック スターは怒り狂い、ソウルは寝ていた。

そんな時

「死神様も酷い。いきなり朝呼び出したかと思えば、任務いって  
こいだもんなあ……元サーヴァントとはいえ受肉してるんだから、  
もう少し配慮……つてお前らなぜここにいる？」

授業中のはずだよな？ そんな疑問をつぶやく。

「なぜって、死神様の息子が来るっていうから…………」

ソウルの話を聞いている途中で、後ろの方から声がする。

一人の少年と一人の少女がこちらに歩いてくる。

「つむ すばらしいー・さすが父上の学校。見事な<sup>シンメトリー</sup>左右対称だ」

「ああ！ あんたらが噂の息子さん一行？」

「ひつぱり、彼が死神様の息子らしい。」

「やつぱ、親の七光りってのはトライのか？俺もあやかりたいです  
よー」

「ん？ 何……？ 七光りだと？」

喧嘩が始まるのかと思えば、

「フはよせーーー！」

「へえ？ はあ？」

「フは半分に切つても左右対称にはならん。でも8はひつだ？ 縦に  
切つても横に切つても完璧な<sup>シンメトリー</sup>左右対称」

「はあ……」

「フはよせーーー！」

キッズはどうなだれる。

「彼は大丈夫なのか？」

思わず近くにいたリズやパーティに聞くアーチャー。

「きやははは」

「イヤ……だめだよ。かなり」

「ひやつはあーー！」

声のするほうを見ると、ブラックスターがいる。

この学校の正面入口には髑髏のマークに針が出ている装飾があり丁度一人、人が立てるくらいの広さがある高い場所。まあ、好んでいろんな場所に立とうとする人は居ないがそこにブラックスターが立っていた。

「俺より目立とうとするやつは誰であろうと許さねえ！ヤイ死神の息子とアーチャー！俺はお前たちを暗殺するーそして明日のウワサはこうだ」

やつぱりねえー。ブラックスターは遂に神を超えた！つとな！天上天下唯我独尊！！明日の俺には後光が差すだろう！

そう言い切った瞬間装飾部分が壊れ、ブラックスターは落ちる。

左右対称シンメトリーをぶち壊されたキッドは悲鳴を上げる。ブラックスターはとすると、きちんと着地し、

「偉大なる俺様の存在に耐えられなかつたようだな」

なんて言つている。

「よくも、左右対称シンメトリーを！リズ、パーティー銃に変身しろー！」

怒り狂うキッドに銃に変身するリズとパーティ

「売られた喧嘩は買ひやせーなー？ソウル

「えつ？ 売ったのお前だろ？……何これ？俺も？」

「なんなんだ、一体」

アーチャーはついでにけず、そのまま逃げよつかと思つた瞬間、  
ブラックスターが気がつき、

「アーチャー！お前も参戦しろよ！男が廢るぞ？」

「なぜ、巻き込む！」

「一度、お前と戦つて見たいと思つてたからな」

「意味のない戦いはしない主義だ」

「えつ？ そんなこといつたて……まさか？怖いのか？」

「…………」

見え透いた挑発だ。それに乗る私ではない。

「虫唾が走るわーお前ら全員処刑だ！」

キッドは怒り狂つてゐるので、全てが標的だった。

銃の乱射。それをよけるアーチャー、ソウル、ブラックスター。

ソウルは隙を見て攻撃をしようとするが、見破られ攻撃を食いつ。

「くそー いつてー」

そう、武器本来の攻撃力と魂の波長を合体させ攻撃する。

そうすることにより、悪人の魂にも攻撃が通るというわけだ。

それが死武専生の戦い方だ。

アーチャーもよけるが、一発だけ腕に当たる。

「くッ……」

かなりの衝撃だった。腕に穴が開くかと思うくらいの痛み。

ソウルも当たっていたのに、このようなダメージではなかつた。もつと軽かつた。

でも私の場合は…… どうか、あの魔力に似た攻撃か。

「やはり貴方は魂の波長攻撃に弱いんですよ」

後ろを振り返ると、マカ、椿そしてショタイン博士がいた。

? (後書き)

読んでください有難うございます。

? (前書き)

オリジナルが少し入っています！

あと文章少なくて”めんなさい。

?

「なぜ」「？」

「ああ、職人同士の決闘は教職員が立ち会わなければならぬ」という規定になつてゐるからですよ」

「おかげで、私たちも来る羽目になつたんだよねー」

「ショタイン博士、ほんとにすみません」

そつか、それでマカも椿もいるわけだ。

キッドとソウル、ブラックスターは相変わらず戦つている。

「君の体はびりやり、魂の波長攻撃に弱いよつですね」

「そう、それってどういふことなんだ?」

「そうだね……先日から、魂が見えるよつになつたマカさん。君に特別授業」

「えつ?」

突然話を振られ驚くマカ。

「そんなに氣を張らずに……簡単な質問です。あそこで戦つてゐるキッドくんと武器の一丁拳銃　彼らの魂の波長はばつちり合つていますか?」

「はい……普通は2つの武器と魂の波長をあわせるのは非常に難しいですが、とても安定しています。お互い尊敬しあっている……いや、違うなあこがれ？ですか？」

「そう、正解です。二丁拳銃トンプソン姉妹……彼女たちはストリートで育ってきた生い立ちからキッドくんのような気品のある魂にあこがれていて、逆にキッドくんは神経質な自分と違うおおらかで、ポジティブな魂のトンプソン姉妹にあこがれをいだいています」

「だけど……ソウルとブラック スターは……」

ブラック スターがソウルを使おうとしているが、ソウルを持ち上げられない。

「あれは、典型的な魂の波長が合っていない状態だ」

そう、魂の波長が合わないと職人は武器を使えない。

そしてソウルに対して魂の波長を打ち込んでしまうという状況になつていた。

「相手の魂の波長を感じられてないんだ」

「職人と武器は敵と戦う前にパートナーの魂と向き合わなければならぬ」

「それで、私が魂の波長攻撃に弱いのはなぜなんだ？」

「ああ、忘れてました。君はいま、まさにソウルくんやブラックスターくんと同じ現象が起きているというわけです」

「はあ？」

「武器や職人はお互いに魂の波長を感じ合い、魂の波長を使って敵に攻撃できたり、逆に敵の攻撃を防いだりすることが出来る。だけど君の場合、その魂の波長が使えていないからそういうたった攻撃に弱い」

「それでは、魂の波長が使えるようになつたら私も耐性がつくどうことか？」

「そうなると思うよ」

「魂の波長を使つ。そんなことが出来ればいいのだが……

魔力と似た力か……魔術の才能はゼロの私に使うことが出来るのか？

やはりそこは、敵の攻撃を受けずに敵を倒すという戦法に変えたほうがいいのかもしれない。

体を鍛えなおすしかない。

アーチャーはそう心に決めて、彼らの戦いを見ていた。

結果は、一応キッドの勝ち。

のはずなのだが、ソウルがキッドの髪を少し切つてしまい、キッドはそれにより精神崩壊を起す。

最後の最後で一撃必殺のデス・キャノンを撃つがそのまま倒れてしまい、ソウルやブラックスターにとつては引き分けという事で、ひと段落したらしく。

キッドは、一ヶ月ほど学校を休み、その後はカウンセリングを受けながら学校に通うはめになつたそうだ。

そんなことになるとは、俺たちはまだ知らない。

「あのーシュタイン博士」

キッド／＼ソウル、ブラック　スター戦の時にマカはシュタインに話しかける。

「ん？なにか質問か？」

「アーチャーの魂なんですけど……なんていうか……ゆがんで見えます」

「ゆがんでいる？」

「はい、違和感があるとしかいえないんですけど、あれはアーチャーの魂じゃない気がします。魂の後に赤い魂があるみたいに見えます……」

「ふーん。そうね……」

シュタインには少しわからない。違和感といつのは解るが、彼の魂が赤く見えたことはない。

もしかしたら、彼女はソウルプロテクトを解除するほどの魂感知能

力があるのかもしれない。

これは死神様に報告かな？

そんなことをシユタインは考えていた。

今田も学校田和！

いつものように鍛錬し、部屋を掃除して朝食を作り、一人で食べて学校を出る。

死神様から給料？ほいものが支給されるようになつたので、めでたく寮をでた。

立地はなるべく田立たないような場所で森があり、そして死武専から近いところにした。

簡単な一戸建てを購入したのだ。

お金？もちろん宝石を精製して……「ごほん。

死武専での働きもあるが、個人的に様々なものの修理を行なつたりする何でも屋的なものをやつている。

お金がない人には、タダで！ ありそつた人には、ぼったくれ！ を精神に行なつている。

もちろん、昔の俺とは違つて、全てのことを善意でやれるほど、出来た人間じゃないからな。

おっと、素がでていたようだな。

とりあえず、一戸建てが出来るほどのお金を……  
言つとくけど、買ったのは土地だけだからな。

あとは全部私が作つた。

もちろん魔術師の工房……衛宮士郎時代で言つ土藏だ。

大体の構造は全部一緒。ただ、他の人には解らないようなつくりにはなつているがな。

魔術の鍛錬も忘れない。まあ死武専の任務をやつた後に鍛錬なんかするとぶつ倒れているのがここ最近の私の生活だ。

どうも魔力消費が激しい。

一応、毎日千将莫耶かんじょうばくやを投影している。

投影の出来は、それなりなのだが戦闘した後に投影しようとすると、出来が悪くなる。

戦闘で剣にも防御にも魔力を使つてはいるからなのか、魔力消費が激しい。

千将莫耶かんじょうばくやを投影するのに必要な魔力はそんなに要らないはずだ。

それなのに、この魔力消費は……

燃費の悪い車と一緒に?

考えられる原因として私の魂を中心に魔力が注入されていると言つことだ。

まるで何かをカーテンで隠すかのよう……

私の体なのに、何も解らないんだな。なんて思っていたら、いつの間にか時間がたっている。

ヤバイ！工房を封印して隠せるものは全て隠す。

もつすぐ、マカやソウル、ブラックスター、椿、キッド、リズ、パーティが私の家に来る時間だ。

? (後書き)

続きを読む！

オリジナルに突っ走りますよ！！

次の話はもう少しお待ちください。

? (前書き)

遅くなりました！

そしてお待たせしました！（誰も待っていないだろ？けど…）  
相変わらず文がおかしいです！

?

なぜ、このような状況になったのかといつと……

（回想）

学校生活にも慣れてきたころ、死神様に呼ばれた。

もちろん、任務の話かと思っていた。

死武専の生徒は課外授業は基本的に掲示板で選んで受付に申告する  
というのが道理である。

しかし、アーチャーの場合死神様から任務を貰うことが多い。

それだけ、重要度の高い任務をやらされているということなのだが  
……

アーチャーは気がついていない。

それはさておき、いつものように死神様に呼び出され、死神様の部屋へと向かう。

途中で、マカやソウルと会流した。

「あれ？ アーチャーも呼ばれたの？」

「ああ、そうみたいだな」

「珍しいもんだな」

「本當にやうだよね。アーチャーって授業にいつもこないから……」

それは死神様の任務を請け負っているからです。

と言おうとしたら、死神様の部屋へとついた。

部屋に入り、相変わらずなギロチンの鳥居を抜けて死神様のところにたどり着いた。

「おーこんばわー！元気にしてるー？」

「はー」

「ねつ」

「……」

「もう少ししたら、揃いつと思ひけど……」

しばらくすると、キッドとパーティ、リズとしてブラック スター、椿が到着した。

「はい！揃いましたね！それでは特別授業を言い渡しますー！」

「特別授業？」

「せうなんだよねーー色々と考えた結果、君たちでチームを組んでもうおつとゆつてや」

「チームですか？」

「やつやつ、それで戦闘能力向上と交流をかねて、特別授業をしてもらひに」としたのやー！」

みんな驚いている。

「基本的には、バラバラで動くけど、チームでどこかへ行くつてことになつたら、この面子が一番相性がよさそうだからね。チームで動くつて事も学びなさいってことで！」

無理やりな気がするが、皆納得したようだ。

そして、死神様はとんでもないことをいつたのだ。

「特別授業は、アーチャーくんに任せせるからーーアーチャーくんの家に集合！強化合宿をしちゃつてよーー！」

「ええええーー？」

「聞いていないのだが？」

冷ややかな目で死神様を見る。

しかし、死神様は無視をする。

思わずため息が出た。

死神様が私の家の場所を書いた紙を他の監に渡して、

「それじゃ、一時間後にアーチャーくんの家に集合ねー。」

「そういいやがつた。

みんなが、死神様の部屋を出て行つたのを確認し、死神様に問い合わせた。

「何すればいい？そんな急に言われても困る」

「だーかーらー言つたでしょ？戦闘能力向上。もちろんショタイン君も行くから安心して」

「こや、困ります」

「まあそつこわづ……君の戦闘能力は高く置つているんだかい

「…………むつ」

「彼らも血立するからね。その手助けだと思つてやつてちよづだいな」

「…………」

「それじゃーよろしくたのんだよ」

死神様になお世話になつてゐるし（一応）仕方がない。

やるときはやる私だ。

家の掃除をしていたら、鈴がなる。

一応、この家には魔術で結界を張つてゐる。

無断で入ろうにも入れない仕組みになつてゐる。

魔法を使つものもいるしな。私の魔術を秘匿する意味でも、結界を張つた。

ちょっと、異世界の物もあるから、簡単に入れないとこじでいるのだ。

「着たか」

そして、チャイムがなる。

「今行く」

初めに来たのはマカとソウルだ。物珍しそうに私の家を見ている。

「こんな家初めてみたかも」

「ああ」

確かに、洋風の家ばかりで、和風な家は見かけたことがなかつた。

次にきたのは、ブラックスターと椿だ。

椿は、自分の家に帰つたみたいとはしゃいでいる。

ほつ、一応和風の家むこの世界には存在しているのだなと改めて思う。

最後に来たのはキッド、リズ、パーティだ。

和風な家は初めてのようだ、特に畳がお気に入りのようだ。

「美しい……」

シンメトリーな畳がすきなんだそつだ。

よく分からんが。

何をしようかと悩んでいたら、シュタイン博士も到着した。

「リリが、アーチャーくんの家ですか」

じぶじぶと見る。

「こいつ相手だと、ボロが出そうだ。とりあえず、修行の場所として、森に案内した。

「リリなら、思い切つてやつてもいい」

道場も作つてはあるが、武器を使うとなれば外のほつがいい。家を壊されたくないからな。

「やうだね。まずは、アーチャーくんと三人で模擬戦闘をしてもらおう。ただしアーチャーくん一人だから、魂の波長攻撃は禁止ね！どんな手段を使ってもいい、アーチャー君を叩きのめす。それが今日の修行だよ。アーチャー君は逃げてもいいし逆にやつてもいい

「へえ？アーチャーは弱いだろ？なのにこんなことするのかよ。俺は一人でも全員討ち取れるぞ」

ブラック スターはそういう。

「そうだな。オレたちもキッドたちと力をあわせなくともいいんじやね？」

ソウルも言つ。

「おやおや……アーチャーくんはだいぶ下に見られてますよ？雑魚扱いですよ？」

「それは挑発しているのか？」

「まあ簡単に言えば、ううですね」

「こいつら相手に本気出せるか」

思わずつぶやくアーチャー。私にだつて信条はある。  
それに子どもだとやりにくく。

「なめてかかると痛い思いしますよ」

たしなめるように言つショタイン。

「制限時間は一時間。そうですね、負けたほうは私の実験台になつてもりいましょうか？」

イヤだ……それだけは勘弁して欲しい。

「それでは、開始です」

? (後書き)

もう少しオリジナルが続きます。  
これが終われば黒血編をはじめますよー！

? (前書き)

なんとか、オリジナルを・・・  
文章が相変わらずむちゅやくちゅやですが・・・  
どうせ！

?

どうやら、三人は協力せずに攻撃していくようだ。  
チームで来られると、対応しきれるか心配だったが、これなら簡単に流せそうだ。

まずは、マカとソウルが攻撃していく。  
それを右に避け、右から攻撃をする。  
きちんと反応して、防御体勢になる。

「ちつ！」  
「くつ！」

マカは攻撃体勢に戻し、鎌を振る。

どうしてもタイムラグがある。

その隙に左により、攻撃を避けて、左から攻撃する。

「きやあ！」  
「マカ！」

マカの弱点は、左からの攻撃だ。

あと、鎌を振り回すためのタイムラグを何とかしないといけない。

「ふむ……」

「ハーハハ！マカもまだまだだな！俺の攻撃を受けてみるー！」

今度は、ブラックスターと椿だ。

鎖鎌を投げてくる。

「ほつ」

タイミングもいい、しかし攻撃を宣言して攻撃するので、簡単に避けられる。

「ひやほーい！」

椿は忍者刀になり、ブラックスターは攻撃する。  
気配を消していないので、軌道が読める。  
ヒット＆アウエイで、攻撃を入れていく。  
ぎりぎり避けているが、避けるのにも体力を使つ。  
少しは、ダメージがあるはずだ。

「ちつ！」

煙球を使う。

あたりは真っ白になる。

「無駄だ」

目を閉じる。どこに誰の気配があるかを瞬間に察知する。

ブラックスターの方へ干将莫耶かんじょうばくやを投げる。

「くつ！」

煙が収まるごとに、ブラックスターは干将莫耶かんじょうばくやで動けなくなつていた。

ブラックスターの服をそのまま木に縫い付けるように干将莫耶かんじょうばくやが

刺さっていた。

「……」

アーチャーはブラックスターに近づき、ブラックを殴る。そして干将莫邪かんじょうばくやを木から外す。

バン

木に銃痕がつく。

振り返ると、キッドがいる。

「次は、お前か？」

「……そうだ」

キッドは、アーチャーの動きを見ていた。

戦闘能力は、自分以上だと判断した。

三人一緒に連携しないと倒せるかどうかわからない敵。

「これは、ヤバイな」

「キッド……」

「リズ、パーティ、行くぞ！」

「おおー！」

アーチャーを狙つように撃つ。しかし攻撃が当たらない。

森の中へ逃げてしまつたから、木が邪魔で狙えないところもある。そんのは、言い訳に過ぎない。

「ちつー。」

「甘い。敵の行動を見て、先読みして攻撃しなければ、当たらないぞ」

先読みしながら、攻撃しているが、相手の速さについていけないのだ。

数撃てば当たるかもしれないが、連射するほど弾がない。

どうする。

目の前にアーチャーがいる。

銃で連射して、近づけさせないようにするが、全部避けられる。

「くつー。」

接近戦に持ち込まれた。相手は、剣で自分以上の力量の持ち主だ。

攻撃するが、全部避けられるのだ。

「覚悟！』

マカの鎌がアーチャーを襲う。

アーチャーは驚いた顔をして、マ力の攻撃を避ける。

「よつやく復活か……」

アーチャーは笑っている。

「キッドくん、ここは三人で協力しないと！アーチャーには勝てない」

「ブラックスターは？」

「さつき、起した。大丈夫三人でやればよっぽしくはず！作戦を簡単に教えるね」

「攻撃がやんだな」

マ力の攻撃を避けたアーチャーは一人そつそつぶやく。

「三人で協力していくのか？」

あと少しで、一時間たつ。これを凌げば引き分けに終わらせれば、誰も実験されることはない。

ため息をつく。

実験と言うと、いい思い出がない。

凛にされてきた実験の日々を思い出すと、涙が出てくる。

あの時は、死ぬかと……

そんなことを思つていたら、

「見つけた！」

「俺より立ちやがつてー！」

マカとブラックスターが同時攻撃をしてくる。

前回と同じで、鎖をアーチャーの右腕に絡ませる。

「うつやあー！」

マカは鎌を振る。

上手い具合に避けてマカから離れようとするが、鎖があつてつかまへ逃げれない。

「まひ……やるな」

それを狙つたように、キッドの銃が発砲される。

「ちつー！」

アーチャーは空くじ飛ぶ。

「えつー！」

空中に避けられると思つていなかつた、マカは驚く。

「空中では、避けられんぞー！」

キッドは続けて発砲する。

アーチャーに当たったかのよつて見えたが、それは田へりまじだつた。

服を上手く使い、身代わりにしたのだ。  
そのまま、ブラックスターに近づく。

「な！」

そして、鎖を解きそのまま、ブラックスターに攻撃をする。  
それを上手く、防御するブラックスター。

「ヤレ」まで…

シユタインの声が聞こえた。

「結局どうなるんだよ！」

ブラックスターは不機嫌そうに呟つ。

そう、中途半端なときことめられたので、闇ゲーム……博士の実験  
体になるところは、どちらのチームがやるのか……

「それは、引き分けなので、まことに残念ですが、どちらもなしで  
す！」

みんな一齊に安堵した。

「これから、個別トレーニングを云えますから、やつてください  
ね？」

それぞれ、やらないといけないことを伝えていくよつだ。

「アーチャー君は、今日はもういいです。彼らの精がつくものでも作ってください」

「……本当に合宿する気だつたんだな。了解した。美味しいものを作って待つておこつ

その日の夜は、和食で、創作料理を作った。  
久々に色々なものを作った。

田の前に出された料理を見て、その場にいた全員息を呑んだ。

「これ、全部食べていいの？」  
「まさか、見た目だけとかは、ないよな？」  
「凄い料理ばつか……」  
「うまそー」  
「左右対称な料理ばかり！」  
「食べていい？食べるぞ！」  
「すごい……」

「食べてみる。おいしいから

皆で食べる料理はおいしい。

アーチャーになつてからは、忘れていた幸せ。

「アーチャー君の特技ですか？」

「嫌味か？」

「いやー立派な特技ですよ」

「……やっぱ嫌味にしか聞こえん」

「あつそつそう、明日は死神様から任務を押し付けられると思つか  
ら、頑張ってくださいね」

「は？」

「朝早く、死神様のところへ行つてください」

「……了解した」

そして、夜は更けていった。

?（後書き）

次から黒血編です。  
といつとう、本編進めていきます！

? (前書き)

黒血へん開始です！「うまく文章に出来ないの」JR第一

少し修正 9 / 12

?

いつものように、朝早く起きて軽く鍛錬を行い朝食を用意する。

今日は死神様に呼ばれているので、早めにマカたちを起し、朝食を食べさせる。

ブラック スターもパーティもおかわりしまくって、思った以上に時間をとられた。

まあそれは置いておき、皆と一緒に学校へ向かい途中分かれる。

死神様の部屋へとやつてきた。

「お疲れさん」

相変わらずな死神様。

「それで、任務は？」

死神様が私を呼ぶ理由は一つ。任務があるときだけだ。

「まあそう、肩肘張らずにね～！力むと成功しないよ？」

「縁起の悪いことは言わないで頂きたい」

「んーそうだね。じゃあ、これよろしく！」

そうやって渡された一枚の紙

私は早速目を通した。

「エメラルド湖殺人鬼ソンソンーーお前の魂頂くよー。」

いつものように課外授業を終わらせたマカとソウル。

「おうー三つ目の魂、クールに頂きます」

「ねえ？ソウル、魂つておいしいの？」

「ああーつまいぜー別に味はないけど歯ざわり、とくに喉ごしがたまんねえー」

「昨日のアーチャーの料理とどっちがおいしい？」

「ん一味から言えばやっぱアーチャーの方が美味しいけど、やっぱ満足感は魂の方が強いな」

「ふーん……そりなんだ」

「んじゃあ、バイクまわしてくるわートで待つてる」

「待つて、ソウル……あの教会」

「観光なら別の日にしてくれよ？」

「違うーこの感じ……教会から武器と職人の魂反応が一つずつ……それを取り囲むように人間の魂が50～60……」

「そこまで解るのか？」

「『』なんの初めて……何か嫌な予感がする。ソウル、行きましょう！」

「たぐー仕方がないな」

そういうて着いた場所はサンタ・マリオ・ノヴェラ教会  
マカの体が反応する。

「どうした？」

「うそ！…そんなことありえない！」

「どうした？」

「消えた……5、60あつた魂が全部消えた。死武専生としては、  
見ておかないと……」

そして、マカは扉を開いた。

中には一人の人間がいた。

アーチャーも帰る途中だった。

しかし、急いでいるマカとソウルを見かけた。

「？マカとソウルか……いやな予感がするな

気になつたアーチャーは走つてマカたちを追いかけ始めた。

「一人しかいねえーけど?」

「あいつの体の中に武器がいる」

「どうこうことだよ? マ力」

「氣をつけて……出でくる」

そうこうと同時に目の前にいた人間の体から黒い影が出てきた。

「…」

「クロナ、やるぜ?」

しゃべる剣とその使い手。厄介な相手だ。

「うん」

しゃべる剣は黒い液体になり、使い手の剣になつた。

使い手は、その剣で私に向かつて攻撃してくる。

それを上手い具合にとめる。そして、グーで殴る。

向こうの体勢を崩し、そのまま連續攻撃をかけるが、使い手は間一髪で避ける。

「へへー!」

さうに怒涛の攻撃をかける。

使い手の体勢が完全に崩れた瞬間、鎌で喉を切り裂くよつて攻撃した。

しかし、使い手には効かなかつた

「そんな斬撃じゃあ僕を両断できないよ？」

「黒い血！？」

「そう、僕の血は黒いんですよ……」

マカは使い手と距離をとる。

「どうして？」とだ？

ソウルは私に聞く。

「多分だけど、あいつの血液自体が武器だと思うわ。だから、皮膚を切つても血液が硬質化して血管で刃を止められた……ブラックスターみたいに魂の波長を打ち込むことが出来たら体内に直接ダメージを与えるんだけど……魔女狩りでも難しいかも」

「そうか、殺せばいいんだね？そこの扉　　内側に開くんだよね

……ラグナロク、悲鳴共鳴

ぴざやああああいいいいあああ

頭に響く悲鳴と同時に一撃が来る。

「うわああああ！」

さうに連続攻撃がくる。マカは避けるが体勢を崩される。

「マカー！ガードだ！」

ソウルの声に反応するように相手の攻撃を受け止める。

しかし

「ぐわああーー！」

『うやうや、武器をも切り刻む攻撃のよつだ。

「ソウルーー！」

マカは相手に足蹴りをいれる。

相手には、大してダメージを『えられていない。いつたん撤退するしかない。

そう決め、後ろにある扉から出ようとした。しかし、扉は開かなかつた。

「ダメじゃないか、ちゃんと辺りを把握しておかないと……」

「つそー？」

「その扉は内側に開くんだよ」

相手の攻撃が来る。

「マカ、攻撃だ！」

「でも！ そうしたら、ソウルが！ ！」

何が起こったのか、一瞬わからなかつた。

時間がゆっくり流れた。

そう、ソウルが私をかばつて攻撃を受けている。

「ソウル！！」

マカは泣きたくなつた。

ソウルが自分をかばつて死にそつで、何も出来なかつた自分に腹が立つていた。

ソウルを見て、敵を見上げる。隅つこの方でキラリと何かが光つた。

「でわ……」

敵が刀を振り下ろそうとした瞬間、大きな音が鳴る。

ガシャン！ キュルルル

窓が割れたと同時に相手の体に何かが突き刺さつた。

そう、長い棒が回転しながら敵に刺さつしていく。

「ぐつ…… 何で僕のカラダが……」

相手も、硬さには自信があったのだろう。驚いているようだ。

「……これで倒れんとは、厄介だな」

割れた窓から一人の少年が入ってきた。

「棒との接し方が解らないよー」

「クロナ！！てめえ……何もんだよ」

使い手の人は、棒をどうしようか悩んでいるようだ。

「私が？ただの通りすがりの正義の味方だ」  
そう目の前には、アーチャーがいた。

「アーチャー！？」

「もうすぐ、デスサイズとシュタインが来る」

「えっ！？」

「ソウルを見てもらうんだ」

「うん」

「クロナ！取れたか？」

どうやら、敵の剣士は体から棒を抜き、黒い血で止血したようだ。

「まつ……」

すると扉が粉々になつた

「なつお前ーせつかくマカに俺の勇姿を見せよつと思つたのにーい  
いとこじりやがつて！」

「なら、早くここに来るんだな。シユタイン、ソウルを見てやつてくれ

警戒を緩めることなく、シユタインに伝えるアーチャー。

「わかつてますよ

「ぐつ…………」

「どうすればいいの？メテューサ様……」

クロナは、誰かと会話しているようだ。

シユタインの方は、ソウルの応急処置は終了したのだらう。  
立ち上がり

「さてさて、一仕事しましょうか。アーチャー君は一人をよろしく

そういうてシユタインとデスサイズはクロナと呼ばれていた使い手  
と戦い始めた。

クロナを圧倒する、二人。

クロナも黒い血を使い時間差攻撃を仕掛けるが、シユタインの魂の  
波長が効いているのだろう、クロナの方がかなり不利となつた。

数分で決着がついた。

クロナは倒れ、血も武器として機能しなくなつた。

「鬼神を生まないためにも、ここで死んでもらう。」

攻撃しようと振り上げたとき、クロナ指が動いた。

そして、クロナの体から棘が出たり引っ込んだりする。

そり、拒絶反応だ。

「ソウルプロテクト解除」

そういう咳きが聞こえた瞬間、魔力が解放される。

マカもシュタインも驚いた顔をする。

そして、シュタインは叫んだ。

「この反応、魔女か！」

アーチャーは今まで反応がなかつた魔力の源を見る。

黒いフードをかぶっている人。

「これが、魔女か」

この世界の魔法とは一体どういったものなのか。

「ネークスネークコブラコブブラ……ベクトルアロー」

その魔女から攻撃が迫つてくる。

アーチャーは千将莫耶かんじょうばくやで敵の攻撃を防ぐ。

シュタインは、魂の共鳴の魔女狩りで一掃した。

「今日は、この辺にしどくわ……」

フードをかぶつた魔女は、アーチャーを少し見つめ、去つていった。

?（後書き）

まだまだ続きます！

次はエクスカリバーを・・・それこそ番外編として出すべきか？  
いや・・・うーん。悩み中です。

?（前書き）

エクスカリバー編開始！

?

ソウルが倒れたといつ噂はあつといつ間に広がった。

マカもショックを受けているようで、気分が沈んでいるみたいだ。

そんな中、私は図書館でこの世界について調べていた。

ここに住むのであれば、一通りの歴史やこの世界での概念を学んでおかないと……

自分の行動しだいでは、自滅する可能性だつてあるのだ。

本を選び手にとって色々読む。

魔女のこと、鬼神のこと、魂のこと、死神様のこと……

知らないことは一番の罪である。

本を元の場所に戻し、他の本を探そうとしていたら、階段を下りたそばでブラックスターを見つけた。

近くには、キッドもいる。

「さあやははー！カリスマ・ジャスティス最高ー！」

「おーーー君図書室では静かにしたまえ」

「あーーーフリイー……つてキッドー！」

「何だ？お前もおしおき食らったんか？」

「どうやら、グラック スターは仕置きで図書館の本整理でもなされでいるのだろう。

全くと言つていいくほど進んでない……

証拠に本が山積みされていて、その頂点で漫画を読んでいる。

「違つ。本を借りに来たんだ。何かすばらしい芸術品が見たくてね。君の尻の下にある本をとつたいんだがよいかな？」

「ああ、これが？」

「ひむ」

キッドは本を手に取る。

ブラック スターは覗き込んで本の題名を読む。

「何だ？それ？エク…… ハックス…… エク……ダメだ！読みねえ」

「エクスカリバー」

キッドの言葉に、アーチャーは反応する。

「エクスカリバーだと？」

「あつアーチャーじやん」

「どうしたんだい？」

「それは、どうこうしたものなんだ？」

「ああ、”聖剣”と呼ばれる伝説の剣だそうだ。その剣を地面から抜き、解き放ったものは勇者と称され永遠に讃えられる。過去にエクスカリバーを手にしたものは”王”にまで登りつめたと聞いている。職人王アーサーだったかな？」

「やっぱりあのエクスカリバーか

この世にも、エクスカリバーが存在するらしい。しかもアーサー王のくだりまで殆ど一緒である。アーサー王……そう思って思い浮かぶのは、彼女。セイバーの剣。そして、衛富士郎と関係のある剣。だが、なぜ投影できないのか。それが解らない。

「さぞかし、美しい左右対称の剣なのだらう…スバラシイ…」

「”勇者””王”俺にぴったりじゃん！」

それ、それ思いを馳せているとこひに、シュタインがやつてきた。

「ああ、エクスカリバーね」

「博士は、聖剣について、何か知っているんですか？」

「聖剣エクスカリバー……俺にも無理だつたよ

「何ー？ チャレンジしたのか！？」  
「博士にも抜けなかつたとは……」

「…………」

シュタインは無言のまま何か考えているようだ。

「これは、何があると考えていい。」

あの顔は、何か知っている。そう感じるアーチャー。

「聖剣エクスカリバー……」

「興味しんしんだぜー！」

場所は、ブリテン島北部。キッド・ブラックスター・アーチャーは滝を見上げながら、会話をしていた。

「「」の頂点にあるのか

「もうすぐだな」

もつと大変な場所にあるのかと思こきや、案外近くの洞窟で封印されているそうだ。

キッドは、スケボーの改良版ぽい乗り物で、すでに上がり始めている。

ブラックスターも負けじとキッドの後を追っている。

シュタインの反応に引っかかりを感じながらも、アーチャーはそのまま着いていった。

「あれ? キッドは? 妖精の楽園”悠久の洞窟”にたどり着いた。

「あれ? キッドは?」

「下が泥で降りれん……クツが汚れてしまつ  
何やつてんの？お前」

「おぶつてくれ」

「一生やつてるー」

「彼がないとエクスカリバーの元へたどりつけん」

「あつ……」

結局ブラックスターがキッドをおぶつて、アーチャーが傘係となつた。

そのまま進んでいくと小さな妖精と出会つた。

「おお！ 妖精だ」

「エクスカリバーはこの先にいるのか？」

可愛い妖精は、すごい顔をして

「うん」

そう返事した。

絶対何がある。これは……ヤバイかもしれない。

アーチャーはそう思いながらもキッドたちについていく。

最深部までたどりついたようだ。

真ん中に丘があり、剣が刺さっている。

「おい！ あれが？」

「ああ、間違いない。聖剣エクスカリバーだ！」

あれ？見たことある剣と全く違つんだけビ……もひといり……  
どういつたらいいんだ。

なんていうか……氣品？見たいなのがあつた。

しかし、田の前の剣はどうだらう。

確かに綺麗な剣ではあるが……

嫌な予感しかない。あけてはいけないパンドラの箱のような感じ。

「わーい！俺、勇者……！」

「なんと……」

ちょっと待て！そんな簡単に抜けるのか！？それでいいのか！？  
選ばれた者しか抜けないんじやないのか！？

なんかセイバーの偉大さがガクンと下がつたぞ……どうしてくれれる  
んだ！

キッドも同じことを思つてゐるみたいで、ブラックスターにむか  
一度やるひといつてゐる。

ブラックスターは刺し直し、今度はキッドが抜こうとしている。  
サクッと抜けた。どうやら誰でも抜けるらしい。じゃなんでショタ  
インはあんな反応をしたのだろうか。

疑問はすぐに解けた。

「よくきたな！若者たちよ」

「聖剣が……」

「あいさつがおくれたな！私がエクスカリバーである

そういう、現れたのはシルクハットをかぶつた人間みたいな生き物だった。

「さて、ブラックスターはちゃんとやつているかな?」

ブラックスターにお仕置きを言い渡したシドが図書室にやってきた。

本は綺麗に並べてあり、思わず関心する。

「やれば出来るじゃないか！」

「あー！ シド先生！ この本を納めれば出来上がりです！」  
そこにいたのはブラックスターではなく、椿だった。

「椿！？あのクソガキ！！椿に押し付けてどこ行きやがった！」  
「そんな……いいですよ！私お掃除好きですから」  
「ブラックスターなら、キッドやアーチャーと一緒に聖剣取りに行きましたよ？何かまずかつた？」  
シュタインはそう答える。

聖剣つて……あの聖剣か？」

「そニエケヌナリバ」

「空を裂き、地を持ち上げる伝説の剣……」

- 1 -

「新編のばんじり」

「ああ、やめておいで。やめておいでよか」

「お前が聖剣？そのなりで？ちょーしょべえー」

「では聞くが、君はそのなりで何者なのだ！？」

「俺か？俺はブラック　「私の伝説は12世紀から始まつた！君たち見たところ職人のようだな？どこから来た？」

「いちいち杖をこつち向けんな！うざつてえ」

「私たちは死武専」「そうだ！いいものをみせてやるつー！」

「聞いといて聞かねえのかよ」

なんなんだこの物体は……

ブラック　スターもキッドもイラライラしているようだ。

このHクスカリバーどうやら、話を聞かない上に自分の話しかしていない。

あれ、なんか泣けてきた。  
エクスカリバーの凄さがなんか半減しているような気がするんだけど。

氣のせい？いや……そんなことあるかもしねない。

「おい、アーチャーどうしたんだよ？」

「いや……思つていた以上にこれはきつい」

シュタインが合わないと言つたのも解る。

こいつに合わせれる奴はいないんじゃないかと言つへりらいうザイ剣  
だった。

ああ、セイバーのエクスカリバーが懐かしい。  
あれはしゃべらないけど……

「おぬし、何者？」

「私が？私はアーッ私の朗読会へ招待しよう。まずはこの説明書を読むのだ！」

「これは、相手するのはきつい。

「虫睡ダッシュだな」

「同じく

ブラック スターとキッドはエクスカリバーが剣になつた瞬間を見計らつて、再び刺した。

「誰がお前なんかと……」

「虫睡が走るわ」

そういつて、帰つて行く。

「アーチャービトした？」

「私は、他にやることがあるから、先帰つてくれ

「何をやるんだ？」

キッドは不思議そつに聞く。

「ああ、妖精に話を聞こいと思つてな」

「物好きなやつだなあ」

ブラック スターはキッドをおぶつてそのまま帰つていった。

? (後書き)

もう少し続きます！  
オリジナルを入れたいと思つてます！

? (前書き)

おまたせしました?  
エクスカリバー編の続きです!

10 / 4 修正

?

キッドたちが見えなくなつて、再びアーチャーは丘に上がる。

そして、刺さる剣を見つめる。

これが噂のエクスカリバー

アーチャーは、剣を持つ。

そして、鍛錬の時と同じように架空の敵を想定し剣を構える。すると手に微量の電撃が走った。

「……………エエぐいぐと遅いたのだから」

微妙な電流に怒つて、エクスカリバーが人間の形へと変化する。

「やはり、無理なのか?」

アーチャーは、職人のくせしてこの世界の武器と相性が悪い。

ソウルや椿、トンプソン姉妹が武器になつている時に触つてみたが

大惨事になつた。握るどころか、もつとすらままならない。

エクスカリバーの場合は、少しマシになつただけだ。

「おぬしは、職人ではないのか？」

「一応は「私の職人には、なれないのか！？」

「……そんな「残念だ！せつかくだから、私の武勇伝を聞かせてやる」

「……」

「私の伝説は12世紀から始まつた！あれは、日差しの強い真夏だったか……いや、肌寒くなる秋だったか……当時の私は悪でねえ……そういえばもう冬だったかもねえ。すゞく「悪」で巷でも有名な「悪」だった。悪そうなやつは皆友達だったよ。美女たちは私を取り合いをしていたよ（以下略）」

「はあ……」

アーチャーはため息をつく。

そして、集中する。

「いつたん黙れ。<sup>トレー・スオン</sup>投影開始」

「ん？ 何か「<sup>ノリ・メ・タンゲレ</sup>我に触れぬ」

すると、赤い布がエクスカリバーに巻きつけられる。

そう、マグダラの聖骸布だ。

男ならこの束縛から逃れることができない。

まあ、こいつが男と言う前提で投影したのだが……

「何をするシー。」

「……勝手に話を始めるからだ」

「ヴァカメ！！私の偉大な伝説が聞ける機会など、なかなかないんだぞ？」

「別に」「ヴァカメ！朗読会は正座で聞くものだ」

「カラドボルク  
“偽・螺旋剣”」

「ヴァカメ！そんなので私は死なん！伝説は  
うきやああー。」

「あつ……やつてしまつた」

少しどこより、かなりイライラしていた、アーチャーは思わず攻撃をしてしまつた。

「ヒッキシ、イッキシ、ヒッキシ」

「……へんなくしゃみだな」

「おぬしは一体何者だ。この技は魔法に近いな」

「！」

「魔法といつても、私の敵ではない！12世紀の悪だつたこひは、もつと無茶を……」

「もう一度、殺るべきか？」

本気で、考へ出したアーチャーであった。

## 地球のどこかの魔女集会ミサ

「ジヨーマ、ジヨーマ、ダバラーサ。これにて魔女集会ミサおひらきー。」  
クロナと一緒に田つきの鋭い髪の短い女性が集会を後にしようとしていた。

そこに、蛙の帽子をつけた女と鼠の帽子をつけた女が行く先を阻む。

「なんのようかしら？ エルカ＝フロッグとミズネ」

「メテューサ……あんた死武専に潜伏して何やつてんのよ？ 田障りなのよ」

田つきの鋭い女性 メテューサはエルカの方を向く。

「私の死武専での研究はこのまま続ける。魔女ミサの結論でもそくなつたじゃない。まばあさま魔婆様もおっしゃたでしょ？」

「魔婆様は目を悪くして目の上のたんこぶに気づいていない。死武専は魔女の魂を狙う組織だぞ！ お前一人のママで我々が危険にさらされるかもしれないわ！ それに、魔女の敵になりかねない鬼神を作ろうだなんて！」

その言葉が終わると同時に、メテューサはエルカとミズネの口に手を突っ込み一言、

「カエルとねずみふぜいが……おしおきするわよ

「ひい！？」

「でわ、ジョーマ、ジョーマ、ダバラーサ、保健の先生が遅刻する  
わけにはいかないでしょ？」

「ゲー」「一」

うなることしか出来ず、そのままエルカミズネはメデューサを見  
送った。

先ほどから、エクスカリバーが一方的に会話している。

「…………ふう」

話を聞かないエクスカリバー。しかし、一方的に話す彼の話にも、  
色々な情報を得ることが出来た。

本を読んでいるだけでは得られない情報ばかりだ。

まあ、彼……エクスカリバーを信じるならば……だが。

「長い間生きてきたが、おぬしのような人は、初めて見るな。職人  
といつていたが、相棒はないのか？」

「相棒……」

そう言つて思い出すのは凛だつたり、セイバーだつたりする。まあ  
相棒と言えるかどうかは微妙だが……

「……その歳でここまでたどり着けるのに、相棒はないのか？」

「相棒……」これのことか？「

そういうて、見せたのは十将莫耶かんじょよひや

「ヴァカメーこれは、鉄の塊だ。私が言つのは武器と呼ばれる相手だ」

怒りながら、杖を私に向けてくる。ちゅうとウザイ。

「いない」

「それにこの鉄の塊には不思議な力が働いているようだが……」

「解るのか？」

「ヴァカメーそれぐらい解らんでどうする!」

さらに杖をシンシンと私の顔に攻撃してくる。やつぱり生理的に無理。まだ金ぴかの方がイライラしない。凛がここに会つたら、真っ先にガントをぶつ放すだろう。

「魔女の魔法に近い。おぬし狙われるかもしかんから注意しておくれのだな」

「言われずともその予定だ」

「その護衛のために私が人肌脱いでやろう!…さあ!…私を使うんだ!…」

エクスカリバーが人型から剣に戻り、上のほうから降りてくる。

それを受け取った瞬間、丘に差し込んだ。

キッドやブラックスターがやつたようだ。

「正直面倒なんで、貴様はここにいるべきだ」

そのときのアーチャーの笑顔はすこしく輝いていたと周りにいた妖精たちは語る。

? (後書き)

改变しました。  
続きはもう少しをお待ちください。

? (前書き)

お待たせしました・・・

なんか勢いじゃないとかけないなあつてのを実感しました。

矛盾万歳でいろいろかなあなんて思に出すのが好きです。

?

魔女牢獄で、ある日一人の男が脱走した。

その男は、魔眼の男。

少々頭は悪いが、彼はすごい能力を持つていた。

その能力とは……不死。

「あんたが、俺を解放してくれた変わり者の魔女か？」

その男は今、メデューサと一緒にいた。

「メデューサよ。よろしく、魔眼の男」

「魔眼の男　　そうか、俺はあの牢獄に入れられて、名前も何も取られてしまつたんだな。そうだな、今は自由の身だから、フリーとでも呼んでくれ」

「フリーね。よろしく」

「どうだらう？何かお礼をしたいのだが」

「いいのよ。気になさらないで」

「それでは、俺の気がすまない」

メデューサは魔眼の男の性格を把握している。

思わず笑みがこぼれる。

「そうね、じゃあ一つ頼みたいことがあるんだけれど……」

ある武器と職人を潰して欲しいの……簡単でしょ？

マカとソウル、ブラックスターと椿、そしてアーチャーは課外活動のためにロンドンまで来ていた。

「ひやはあああー、ブラックスターインロンドンだぜー！」

アーチャーは後ろから見て一言、

「元気だな」

椿は雪が降っているのに、ブラックスターの格好が半そでなので、風邪を引かないか心配しているようだ。

「ブラックスター……寒くないの？」

「何言つてんだー」の寒さ、脱ぐことはあっても着ることはない

「いかがなものかと……まあ何とかは風邪引かないというしな」

「なんだとー！」

アーチャーに突つかかるつとするブラックスターを椿は宥める。

「マカちゃんもソウルくんも、見ていないで……」

マカとソウルは互いに無視している。

現在進行形で。どうやら、仲が悪くなつたみたいだが……前ほ「」うじやなかつたはずだ。

「椿、どういふことだ？」

「なんかシュタイン博士に特訓してもらつてから、あんな風になつちやたみたいで……」

あの人何したんだよ……

とにかく、マカとソウルは仲悪いまま、この任務を受けているらしい。

最悪、任務失敗ということもあるのか……

注意しておかねば……

そう、考えていたアーチャーは遠くで光る何かを発見した。一瞬であつたが、魔力反応もある。  
魔女がいる。そう考えたアーチャー。

「椿、ブラックスター。ソウルとマカを頼む。私は少し用事が出  
来た」

椿とブラックスターにマカとソウルを任せ、光っていた場所へ向  
かつた。

そのころ、メテューサは別の場所へと動いていた。  
すべては黒血の研究のために。

フリーから少し離れた場所で、観察するために。

フリーとマカ、そしてソウルは出会った。

「ふふふ……黒血はビビ活性化するかしらね」

思わず笑みがこぼれる。

水晶で黒血の持ち主の観察を始めようとした瞬間、後ろに白い髪の赤い服の少年が立っている。

メテューサは、気がついていた。

「お前は何者だ？」

アーチャーの問いにメテューサは答えた。

「私？私は魔女よ」

その答えを言った瞬間にアーチャーの隙を狙い、後ろへと回り込み、拘束する。

首元には刃物。

「あらあら、案外あつけないのね」

もつと抵抗するのかと思っていた。自分の見込み違いかしら？

「（早いが……）期待に添えれず申し訳ないな。貴方は魔女か。初めて見る」

アーチャーにとつては、初めて見る魔女。

アーチャーは思っていた。

ああ、破壊の目だ。

あの目は破壊に快楽を求める人種の目だ。

ああいつた類は死ぬまで破壊衝動が消えない。

魔女は思つてゐる以上にやつかいな相手かもしけない。

「何を考えているのかしら？」

「別になんでもないわ」

「……」で、貴方の首をはねるのもありだけど……そうね、試してあげる。あちらも楽しそうだけど、いやらじも、面白そつだし」

そういへば魔女の気まぐれ。

「試す？」

「ベクトルアロー」

そうメデューサが言つと、真っ黒い矢印がアーチャーを襲つた。

「ちつー?」

襲つてきた矢印をアーチャーは干将莫耶かんじょうばくやで叩き飛ばす。

どこに現れるか解らない矢印を叩きるのは至難の技だった。いろんな方向から出されると、対処するのが難しい。

唯一の救いは、一定方向の矢印しか出してこないことだ。

いつたいこの魔法は……

これが異世界といふことなのか。

この世界は、私の世界から見れば夢物語のよつな世界だ。

魂を食らう武器、その武器と一緒に魂を狩る職人、そして魔法を使う魔女。

私が知る世界では魔法ではなく、魔術と言つ。

魔法は魔術の完成形である。いわば、現実不可能なことを可能とする。

そう、この世界の魔法はなんでもアリってことなのだ。

それに、なんの障害や対価無くして魔法を唱えている。

この世界の魔法が完成形だからなのだろうか。

ああ、面白いものを見つけた。

これは本当に興味深い。

魔女は女しかいない。まあフリーみたいな特別な例もあるけれど。

それなのに、目の前の男の剣には、何か特別な力を感じる。

この子を研究してみたい。

黒血も捨てがたいが、こちらもなかなか面白い研究が出来そうだ。

アーチャーは反撃の隙をつかがっていた。

これから、反撃に移りひとしたとき、「メテューサは、

「なかなかやるわねえ……でも時間切れ」

「なんだと……？」

「どうして」とか理解できなかつた。まさか、撤退するのか？

「ふふふ……また会える気がするわ」

そういつて、魔女 メデューサは消えた。

「くっ！…待て！」

アーチャーがメデューサを追おつとした瞬間、目の前におたまじやくしの人形が転がってきた。

「！…？」

そしてその人形は爆発したのだった。

? (後書き)

矛盾等何かありましたら、感想にぜひお聞かせください。  
筆の進むまま書いていきたいと思います。

どうぞ見守ってください。

? (前書き)

お待たせしました！  
長い間更新できなくて申し訳ないです。もひらしどんぽんと更新したいです。

?

「ちつ……」

少し焦げた服を見て、思わず舌打ちをする。

魔女は消えた。収穫できた情報は少ない。

「魔女の魔法の効果を知れただけでもよしとするが……」

向こうも同じことを思っているのだつて。

それでも先ほどは危なかった。

あのおたまじやくしみたいな爆発物の処理は結構大変だった。

爆発する数秒前で遠くに飛ばし、『おたまじやくしを壊した。

なかなかの神業だと自分で思った。

人間やればできるじゃん。

(この時点で人間技ではないことに気がついていないアーチ  
ヤーである)

なんて白画白賛。

そもそも、ソウルたちと合流しないと。

そう思い、アーチャーは元の場所へと戻つて行つた。

ソウルたちがボロボロになつていた。

「戦闘でもあつたのか？」

アーチャーは知らないので、椿に聞いた。

「ええ、魔眼をもつた男が襲撃してきて、それを撃退したところです」

「へえ……」

よく見るとマカとソウルの間にはまがまがしい雰囲気はなくなつており、元に戻つたようだ。

「よりいつそつ絆を強くしたといふか」

「ん？ アーチャー何か言つた？」

マカは笑顔でこちらに聞いてくる。

「いや、いつものマカに戻つたみたいで安心したよ」

「えつ……」

マカが少し顔を赤くしている。

ブラックスターはソウルと端っこで会話を始めた。

もちろんアーチャーの発言についてだ。

「なあ、アーチャーってあんな顔してあんなこと言いつのか……」

「ああ、結構無自覚ぽいぞ」

「天然か？ 天然なのか？」

「何してんだ？」

アーチャーはソウルたちに話かける。

急に現れたアーチャーに驚く二人。

「なんでもないぜ！」

「そうそう！」

「そりゃか？」

アーチャーは不思議そうな顔をしている。

「帰るんだろう？ 早く死神様に連絡して帰らうぜ」

ソウルは一人を急かす。

「ああ… そうだな」

ソウル、マカ、ブラックスター、椿、アーチャーはロンドンから死武専へと帰還した。

同時刻、とある場所にて

男に囲まれて一人の剣士は一言呴く。

「どうしよう……」の人たちとの接し方がわからんない

「喰え」

「うん。ひめいきょううめい悲鳴共鳴」

すると男は動搖する。

「スクリーチアルファ」

残つたのは、魂だけ。

「これなら、誰とも接しなくていい」

幸せそうな顔で、地べたで寝転んでいるクロナ。

その光景は異様だった。

「貴さん、解つていいと思いますが、この時期が来ましたね。どうですか？勉強は、はかどっていますか？」

死神武器専門学校。

学校と言つのだから、テストがあつてもおかしくはない。

しかし、私も受けないといけないのか。

生徒だから、受けなければならぬのは解つてゐるつもりだし、学校に通うものとしては、避けて通れない道と解つている。

が、しかしだ。

「授業をまともに受けたことがない私にテストはしんどいのだが……」

アーチャーは授業をまともに受けていなかつた。

それは、サボつていたわけではなく、あるときは課外授業で、あるときは病院となかなか機会に恵まれなかつたのだ。

ここ最近は死神様の任務をこなしていただけで、授業には一切出でいなかつた。

この世界に慣れるには実践しかないと思つたのが仇となつたようだ。

マ力に相談してみるか。

アーチャーはそう、心に決める。

そんなことを考えてこらへりながらシユタインはいなくなつていた。話が終わつていいようだ。

「超筆記つて魂学の一教科だけなんだがなあ……」

「赤点きちい～」

「じつやう、一教科だけのようだ。これなら何とかなるかもしけない。

マ力たちと一緒に部屋を出て行く。

「マカー！」

「ん？ 何？ アーチャー！」

「今回の筆記のことなんだが、過去問とかあるのか？」

「えつ？ いや、ないよ。でもこの教科書とこの問題集をやつしてればなんとか取れると思うよ」

「そうか、的確なアドバイスをありがと！」

「いいえ、どういたしまして」

そういうで、マカたちと別れる。

それから、アーチャーは図書館へと向かった。

テストまでの数日は、それぞれが勉強をしていった。

マカは教科書や問題集と格闘。

ソウルはなにやら、怪しい行動をしている。

ブラックスターは解けなかつたら罰ゲームを決めて勉強するが、罰ゲームばかりやって、全く勉強が進まない。

そんなブラックスターのフォローする椿。

キッドはリズの眉毛を真剣に考えている。

リズとパーティも初めはがんばっていたが、他の事をやりだして全く勉強をしていないと言う状況であった。

そして、アーチャーは優雅に紅茶を飲んでいた。

「久しぶりに勉強というものをやつたよ」

この時間が続ければいいのに。とそう願わざにはいられなかつた。

そして次の日

試験が始まる前に黒板の前でボコボコにそれでいるブラック　スターがいた。

「試験管のシドだ。試験を始める前に一つ。昨日、シュタイン博士のところにテストを盗みに行つたバカがいる。不正は行なわないよう」

そういつて、試験が始まつた。

しばらくすると、ソウルも不正していたため、服を全部脱がされ、パンツ一枚になつていた。  
マカはあきれているようだ。

アーチャーもため息をつくと、問題に集中する。

穴埋め問題からだ。

「健全なる魂は健全なる と健全なる に宿る」

「に宿る」

ああ、どこかで見た気がするなあ……

健全なる魂は健全なる精神と健全なる肉体に宿るだつた気がするな。

それから……

順調に問題を解いていく。

KIEL「ゴーンカーンゴーン

そしてテストは終わつた。

超筆記試験結果発表！

1位 マカ . . . 100点  
2位 オックス君 . . . 99点

27位 椿 . . . 81点

45位 アーチャー . . . 65点

108位 ソウル . . . 35点

113位 リズ . . . 28点

128位 パティー · · 2点

問題外 ブラック スター・キッド

「まあまあだな」

結果を見たアーチャー思つ。

高校の時もこれくらいだった気がする。

そんなに頭が良かつたわけじゃなかつたしな。

「まあ、補習にならなかつただけでもよしとしなきゃね。それにしても、キッドくんは相変わらず見たいだね」

マカは苦笑いしている。

キッドが問題外になつたのは、名前が綺麗に書けず、一時間かけて名前を書いていたからだ。

最終的には、名前の欄を消しすぎて、テスト用紙が破れていたが。

「マカ！いくぞ！」

ソウルがマカを呼んでいる。

「うん！ いまいく！ じゃあね！ アーチャー！」

マカは急いでソウルの元へと行く。

アーチャーはマカとソウルを見送る。

「怪しい奴も動き出しているし、これは嵐がくるな

そんなことを考えていた。

? (後書き)

まだ改良の余地ありますねえ・・・これから黒血編を・・・かけた  
らしいなあ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7809u/>

---

SoulEater - fate-

2011年11月8日23時12分発行